

糸屋 鎌吉 (いとや・けんきち)

1、プロフィール

あらゆる技法を一つの作品の中で用い、あらたな詩風を確立している詩人。音楽界との交流も深く、日本ショパン協会の重鎮としても活躍。詩集『尺骨』で土井晩翠賞を受賞。

<生没>

1911(明治 44)年4月8日 ~ 2003(平成 15)年7月 27 日

<代表作>

詩集『首の蔭』『パラダイス』『嘘の木』『尺骨』『舟底・雪』
『糸屋鎌吉詩集(日本現代詩文庫)』

<青森との関わり>

八戸町(現八戸市)に誕生。八戸中学卒業まで在住。郷里の文芸誌「手稿」(和泉幸一郎等同人)に参加。

2、作家解説

明治 44 年4月8日、八戸町(現八戸市)に生まれる。本名西塚俊一。明治生まれの鎌吉は、少年期、青年期は横光利一、中河与一などの「新感覚派」の言語感覚、発想法、それに加えて超現実主義、モダニズムの技法、又「新興芸術派」の文学観、発想法を十分に吸収した。それから糸屋の故郷は太平洋に面した八戸であるせいか、海という言葉が作品に多く見られる。糸屋と海とは切り離すことができず、原風景となっていると言える。さらに糸屋の詩は、自然に託しての表現が多い。糸屋の詩についてまとめると、モダニズムとか超現実主義とかいうよりもあらゆる技法を一つの作品の中で用いている。それが自在さと円熟さと共に、内実するものとの技法が一体となって、糸屋独自の詩風を確立してきたと言える。そしてこの詩風の確立は円転として自在、とどまることを知らないとも指摘されている。ところで、糸屋は詩人として活躍すると同時に、東京交響楽団に事務主事として入団(昭和 26 年)したり、日本ショパン協会の事務局長を担当(昭和 39 年)する

など、音楽界においても活躍している。詩集『尺骨』により土井晩翠賞を受賞（昭和61年）している。「青衣」主宰。（引用参考文献『糸屋鎌吉詩集－日本現代詩文庫 86』土曜美術社より著者年譜及び比留間一成「新しい詩風の確立－糸屋鎌吉の詩をめぐる－」）

3、資料紹介

○『嘘の木』

図書

1974(昭和 49)年4月

261mm×190mm

著者円熟期の詩集の一つで、現状の閉ざされた中から言葉を立ち昇らせ、その所在を確保し続け、ゆるやかに言葉を紡ぎだしている。この心境は生こそ詩であるということを意味していて、詩の中に生が存在するところから創作された作品群である。